

編集後記

編集長(ダン シロウ)

* 2025年秋の対人援助学会は西成／釜ヶ崎のレポートがとても面白かった。近年、あまり何も面白く思えず、学会参加してもハイハイなんて気分で帰宅することが多かったので、久しぶりに楽しかった。

会場の大坂キリスト教短期大学も、私のような大阪北摂文化圏(梅田／阪急沿線)馴染みの者には、異国感さえ漂う阿倍野界隈。天王寺駅からの経路の食堂も喫茶店も、ちょっと変わった体験の宝庫だった。前に訪れたときも感じたことだが、満載だった。

* スケジュールの巡り合わせだけのことだが、私的には今号の編集作業は余裕だった。仕事場泊まり込むことも多く、食事に外出する事が増えた。余裕があるので、上映中の映画ラインナップが気になる。その結果、「TOKYO タクシー」「平場の月」「爆弾」「秒速5センチメートル」と相当なペースで日本映画を観ることになった。面白いから良いのだが、これに録画したドキュメンタリーや netflix、AmazonPrime が重なるのだから大忙しだ。

* 300ページ余の web 雑誌が定期刊行される現状が安定しているので、最近ではちょっと緩い要素にも許容的だ。私事都合で休載の人が増えて、アップ日に数日の遅れが出たとしても、仕方がないと受け止めるようになった。手綱を緩めるとグズグズになるなんて、未熟な時期の話だ。安定期がマンネリ期にならないように、執筆者の皆様には緊張をと願っている。

編集員(チバ アキオ)

2023年「児童相談所と近接領域における 家族療法・家族援助の実際 第31回研修会 in 浜松」[児童相談所と近接領域における 家族療法・家族援助の実際 第31回研修会 in 浜松](#)で共演させていただいた作家

の村井理子さん。なんでも、学生時代に京都にいたころ、阪急京都線西京極駅の近くに住んでいたそうで、私が今勤務しているところの最寄り駅なので話が弾んだ。世代も同じで、お金のない学生時代、一人暮らしで元気がない時は駅前の当時の阪急そばに救われたそうである。私も阪急豊中駅前にあった阪急そばによく通った。村井さんとの出会いの前に読んだ『兄の終い』は村井さんのノンフィクションエッセイ。このエピソードには児童相談所もワーカーも登場し、そのため「児童相談所と近接領域における家族療法・家族援助の実際 第31回研修会 in 浜松」の企画担当、早野さんは村井さんへの出演オファーをし、快諾をしていただき、登壇してくださった。兄の子どもさんへのサポートをしてくださった児相の方々には心から感謝しているそうで、こうした分野のお誘いがあればそれにこたえることが自分の使命だと考えていると話しておられた。村井さんとの出会いをきっかけにかなり村井さんの本を読んだ。『エヴリシング・ワークス・アウト 訳して、書いて、楽しんで』『はやく一人になりたい！』『はやく一人になりたい！』『いらねえけどありがとう』『本を読んだら散歩に行こう』『全員悪人』『ふたご母戦記』『実母と義母』『家族』…。しっかり村井さんの影響を受けて、パックごはんを活用するようになった。その『兄の終い』を原作にした映画『兄を持ち運べるサイズに』(主演:柴咲コウ、オダギリジョー、満島ひかり他)『兄を持ち運べるサイズに』[大ヒット上映中](#) 脚本・監督:中野量太(『浅田家!』)を観に行った。「家族」が持つ、華やかさだけでは語れない側面もしっかり取り上げられていて、しかもユーモアもあってとてもよかったです。家族に厳しい時であればあるほど、家族を実感する、させられるというのもあるだろう。家族には物語が必要であると団編集長はいつもおっしゃる。その言葉が染み入る状況も経験してこそ、やっとわかる。これでもまだ序の口だということもわかつてくる。そんなことを考えながらの 63 回目の編集作業でした。

編集員(オオタニ タカシ)

今号の編集会議のテーマの一つは、時流とどう向き合うか、という点であったように思います。世の中に

時流があり、その時々でもてはやされ、いつの間にか消えていくものが数多あるように、対人援助においても時流があります。時流に合わせて言うことがコロコロ変わるというのはいかにも節操がないように感じますが、一方で時流に乗らず頑固に独自の哲学を貫きつつ衰退してしまうものもあり、時流に乗らなければよいというシンプルな答えでもないことがまた難しいところです。

今自分が関わっている業務で、大学が地域の子育て世代に向けて開いている「親子教室」があるのですが、こちらは明らかに「こども誰でも通園制度」の影響を受け、利用している親子がこれまでよりもずっと早いペースで幼稚園・保育園の利用を開始し、親子教室を卒業していくという流れが生まれています。結果的に親子教室の方は利用者数が安定せず、利用率も低迷している状況です。

ニーズが無いなら止めればよいというシンプルな答えもあるのですが、ニーズ自体がないわけではない…と思うと難しく、自分たちにできること、やりたいこと、できるとよいと思うことを並べて、今後のあり方を思案しています。

そんな時代の中、“あり続けているもの”的力にも、もっと目を向ける必要があるのかもしれません。マガジンは無事 16 年目、63 号の発行を迎えました。この間、大きな遅延なく定期発行できているのは、いつも締め切り通りに原稿をお送りくださる執筆者の皆さんのお力によるものです。引き続きどうぞよろしくお願ひいたします。

対人援助学マガジン
通巻63号
第16巻 第3号
2025年12月15日発行
<http://humanservices.jp/>

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第64号は2026年03月15日

発刊の予定です。

原稿締切**2026年02月25日！**

執筆希望者、常に募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。**執筆資格は学会員であること。** 現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、**対人援助学会への入会**をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

表紙のデザインを変更したのではない。たまたま今号は、こういう図柄にしてみた。「木陰の物語」に登場する、様々な女性が一堂に会した大判のポスター画を作ったことがあった。その絵をそのまま使ったので、こうなった。

男性版のものと対で作ったので、気が変わらなければ次号は、それが表紙になる。

印刷物雑誌なら表紙は顔だが、web版では、うっかりすると表紙はスルーで該当ページに飛んでしまう読者も多い。

マガジンが全ページに目を通せる厚さではなくて久しいが、たまには表紙もご覧下さい。 2025/12/15